

K J F C 例会 2017 年 10 月 28 日

「私の好きな二人のテナー・サックスと一人のギター」

紅 我蘭堂

AL COHN

いきなり正直にゲロ（白状）いたしますが、普段 K J F C 会員だ、我蘭堂だなんて偉そうにしているけれど、本当に私は「耳」が悪いと自覚しています。・・・致命的に悪いです。

どういうことかと具体的にお話しすると、同じ楽器のプレイヤーが共演している時の区別がさっぱりできません。例えば PRESTIGE レーベルによくある「2トランペット」「4アルト」「4テナー」なんてレコードは、もういけません。レコードを制作したプロデューサーは「うん、これは我ながらベリーグッドな企画だ。ファンも満足してくれるに違いない！」なんてご満悦かもしませんが、私からすれば『小さな親切、大きなお世話』です。さすがにジョン・コルトレーン (ts) とポール・クイニッシュ (ts) の差は分かるような気がしますが、例えばアート・ファーマー (tp) とドナルド・バード (tp)。フィル・ウッズ (as) とジーン・クイル (as)。ジャッキー・マクリーン (as) とジョン・ジェンキンス (as) などとなると、もう白旗を掲げるしかありません。もうヘラヘラ笑いながら「二人でひとつの楽器演奏だと思って聴けばいいんだよね」なんて聴き流していました。

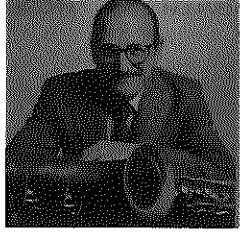
そんな中で最大の鬼門がアル・コーンとズート・シムスのテナー・コンビでした。どっちがアルで、どっちがズートかさっぱり分かりませんでした。

そんな私を KJFC の心優しき仲間たちは優しく、時に厳しく、ご指導ご鞭撻してくれたのですが・・・。『我蘭堂ちゃん、柔らかい音がズートで、硬い音がアルだよ』『フワフワしているのがズートで、ほら今ここでガツンっと替わったのがアルだよ』と。でもなあ～。

そこで一念発起して、アル・コーンのレコードを勉強してみようと思いました。すると、アルって結構、私好みのテナー・サックスでした。今夜はその辺のたくましい音色を楽しんでいただければと思います、

またアル・コーンには作曲家としての 1 面もあります。それも発見でした。本日はその点を重点に聴いていきましょう。（※印がアルの作曲です）

『NONPAREIL』(CONCORD CJ-155)



AL COHN (ts) LOU LEVY (p) MONTY BUDWIG (b) JAKE HANNA (ds) 1981 年 4 月録音

SIDE 1 1) TAKE FOUR ※ 2) UNLESS IT'S YOU 3) EL CAJON

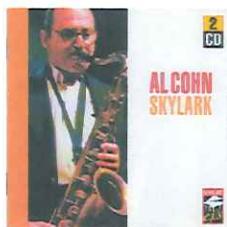
4) RAINCHECK

SIDE 2 1) MR. GEORGE ※ 2) THE GIRL FROM IPANEMA 3) THIS IS NEW 4) BLUE HODGE

アル・コーンの紹介をする場合は、やはりアル・コーン&ズート・シムスのグループの盤から始めるのが王道でしょうが、本日はあえてコーンのワンホーン・アルバムをお聴きいただきます。2曲オリジナルをお掛けしますが、いかがでしょうか。ジャズマンが作曲を得意としているのは、ジャズ演奏に付き物の“アドリブ”も、ある意味作曲じゃないかという意見もあります。確かにコード進行を借りて別のフレーズ（曲）を作る、と言う検証も以前の例会で、フィリー城さんがご披露していました。それでも曲を作るのが好きなプレイヤーと、そうではないプレイヤーがいますね。

さてアルのオリジナル曲はいかがでしょうか。

『SKYLARK』(LIVE AT E.j.'S LR103.606)



AL COHN (ts) DAN WALL (p) NEAL STARKEY (b) BRIAN CHILDERS (d s) 1982年3月4日録音
CD1 1) YOU STEPPED OUT OF A DREAM 2) WOODY'S LAMENT
3) AMERICA THE BEAUTIFUL 4) LOVER MAN 5) SKYLARK 6) WHAT IS THIS THING CALLED LOVE 7) TUNE
CD2 1) I LOVE YOU 2) DO NOTHING' TILL YOU NEAR FROM ME
3) FRED 4) SOPHISTICATED LADY 5) DANIELLE ※ 6) THE GIRL FROM IPANEMA 7) TICKLE TOE 8) TUNE

多分、誰ががこっそりとライブ演奏を録音した音源で音質はかなり悪いです。でも割と好きなアルバムです。この曲もアルのオリジナル曲です。

『STANDARDS OF EXCELLENCE』(CONCORD CJ-241)



AL COHN (ts) HERB ELLIS (g) MONTY BUDWIG (b) JIMMY SMITH (ds) 1983年11月録音
SIDE 1) 1) RUSSIAN LULLABY 2) WHEN YOUR LOVE HAS GONE
3) O GRANDE AMOR 4) YOU SAY YOU CARE
SIDE 2) 1) I WANT TO BE HAPPY 2) EMBRACEABLE YOU
3) I REMEMBER YOU 4) WHEN DAY IS GONE

このCDは、アルのオリジナル曲は入っていませんが、代表作ということで紹介させてください。本日はCDでご容赦ください。

『RIFFTIDE』(TIMELESSS TJL74595)



AL COHN (ts) REIN DE GRAAFF (p) KOOS SEREIRSE (b) ERIC INEKE (ds) 1987年6月6日録音
1) SPEAK LOW 2) BLUE MONK 3) HOT HOUSE 4) THE THING 5) WE'LL BE TOGETHER AGAIN 6) RIFFTIDE 7) DO NOTHING TILL YOU'RE TRUE 8) SECRET LOVE ※

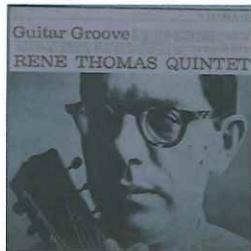
はっきり言って、この1枚のCDを聴いてアル・コーンの虜とりこになってしまいました。これはあくまでも私見ですが、「男性的なテナー・サックスは、かく吹くべき」というお手本です。後にお掛けするデクスター・ゴードンも男性的と言えば男性的なのですが、少しタイプが違う男性と言えるでしょう。あえて例えるなら、(これも物議をかもすかな?) 映画俳優の2枚目役で、アル・コーンが何事にもぐっと耐える高倉健なら、デクスターは自分の感情をさらけ出していく菅原文太でしょうか? それにしても大好きだった曲のひとつ『SECRET LOVE』がコーンの作曲だったとは、知りませんでした。

RENE THOMAS

本当はもっと調べて例会で発表しなければならないのでしょうか、正直に言ってこの人のことはよく分かりません。すごい横着・横柄・横暴をお許しください。

数年前にヨーロッパ・ジャズに凝っていた時期があり、その時に今は無き秋葉原の石丸電気のワゴンセルで買ったのが『MEETING RENE THOMAS』というCDでした。ギターが好きでもあったので、安い割には「当たり!」かなと感じて、それ以来アルバムを見つけるたびに買うという、行き当たりばつたりでした。お耳に合うか分かりませんが、こんなギタリストもいるよ、と気楽に聴いていただければ幸いです。

『GUITAR GROOVE』(JAZZLAND《RIVERSIDE》27)



RENE THOMAAS (g) J.R.MONTEROSE (ts) HOD O'BRIEN

(p) TEDDY KOTICK (b) ALBERT HEATH (d s) 1960年9

月7日8日録音

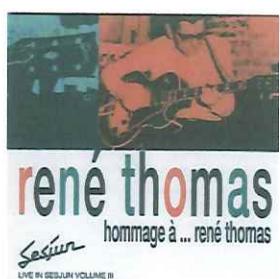
SIDE 1 1) SPONTANEOUS EFFORT 2) RUBY MY DEAR

3) LIKE SOMEONE IN LOVE

SIDE 2 1) MILESTONES 2) HOW LONG HAS THIS BEEN GOING
ON? 3) GREEN STREET SCEN

これがルネ・トマスのデビュー・アルバムだと思います。普通のハード・バップではないかと思います、このアルバムは・・・。

『HOMMAGE A...』(TIMELESS CDSOL-4330) 1974年2月録音



RENE THOMAAS (g) ROB FRANKEN (el p) KOOS SERIERSE

(b) LOUIS DEBIJ (d s) 1974年2月録音

1) MY WIFE MARIA 2) JESUS THINK OF ME 3) STAR
EYES 4) 'ROUND ABOUT MIDNIGHT

マリアというのはトマスの本当の奥様かどうかかも定かではありません。ありませんが、この曲が奥様に捧げた曲だとすると、かなりの恐妻家だったのかと、つい想像してしまいます、余計なことですが。

『THOMAS—JASPAR QUINTET』(RCA ITALIANA PML 10324)



RENE THOMAAS (g) BOBBY JASPAR(ts,fl) AMADEO
TOMMASI(p) MAURIZIO MAJORANA(b) FRANCO MONDINI(ds)
1961年8月録音

SIDE1) 1)OLEO 2)THEME FOR FREDDIE 3)HALF NELSON
4)BUT NOT FOR ME

SIDE2) 1)HANNIE'S DREAM 2)BERNIE'S TASTE 3)SMOKE GETS
IN YOUR EYES 4)I REMEMBER SONNY

ボビー・ジャズパーというベルギーのテナー・サックスとフルートの奏者についてはあまり詳しくありませんが、確かジョージ・ウォーリントン（p）と共に演したアルバムがあったはずです。このアルバムで上手い人だと認識しました。

曲はトマスのオリジナルです。ハード・バップですが、やはりヨーロッパ的な端正さの調味料が加わっている気がします。あくまでも想像の域を出ない私見ですが、このソニーは、ソニー・クラークであつてほしいと願います。アマデオ・トマッサーのピアノ・ソロも聴き所のひとつです。

『MEETING MISTER THOMAS』(GITANES 549812-2)



RENE THOMAAS (g) JACQUES PELZER (as,fl) LOU
BENNETT (org)

GIBERT ROVERE(b) BENOIT QUERSIN(b) ※ 4) ~ 6)
(DOUBLE BASS)

CHARLES BELLONZI (ds) 1963年3月22日録音

1) MEETING 2) IF YOU WERE THE ONLY GIRL
IN THE WORLD 3) WONDERFUL, WONDERFUL 4)
DOCTOR JACKIE 5) HANNIE'S DREAM 6) WES COAST BLUES

このCDでルネ・トマスを知り、もっと聴きたくなりました。でもあまり情報がないので手探りの状態です。このCDではトマスのプレイもさることながらジャック・ペルツァーのアルト演奏も軽妙で魅力的です。この曲はジャッキー・マクリーンの作曲です。

DEXTER GORDON

何で女性のテナー・サックス・プレイヤーがいないのかな？ 女性のピアニストやアルト・サックス・プレイヤー、またベーシストやドラマーもいますよね。でもテナーは私の知る限りではありません。これもまた炎上するかもしれません、やはりテナー・サックスは女性では無理で、男性の楽器でしょうか（私は100%のフェミニストです）。

これも正直にゲロするけれど、本日偉そうに「デクスター・ゴードンの紹介でござい、特集でござい」

なんて大見得を切れるほどゴードンを聴き込んだ訳ではないです。レコードも彼の100枚以上の足跡のほんの20枚くらいしか持っていないません。現在進行形です。でもどうしてもアル・コーンと対比してみたかったです。

一般的に・・・恋や愛が終わった時に、男性は尾を引き、女性は後腐れないと言われます。確かに後々までグジグジ言っているのは男かもしれません。私の周囲にも、そんな男が一杯いました。ところで、私が思うにテナー・サックスでいうと、そんな失恋的心情を表現したら絶品という二人がいます。一人はソニー・ロリンズです、この人の女々しさは類をみません。何でそこまで過去にすがりつくの？と説教したくなります。

対してデクスターは、粋も辛いも何もかも含めた男の心情を吹いているように思っています。昔のテレビドラマにあったように、若女将に恋心を秘めながら、ひとりカウンターで一杯をすすっているキャラクターでしょうか。

デクスター・ゴードンの特徴を一言で語れば、〈自由自在のアドリブ〉と言えるでしょうか？曲のテーマ・メロディーを力強く吹く⇒アドリブを奔放に吹きまくる⇒えっ、ここでこのメロディーを挿入するの？という驚きがあります。本日は、その辺もお楽しみください。（午前3時に、私を野球場に連れてってとはなあ）

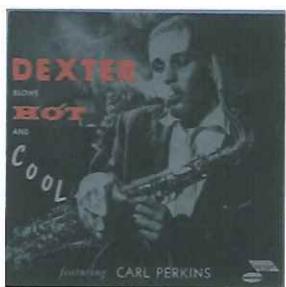
『DADDY PLAYS THE HORN』(BETHLEHEM BCP36)



DEXTER GORDON(ts) KENNY DREW(p) LEROY
VINEGAR(b) LARRY MARABLE(ds) 1955年9月録音
SIDE 1) 1)DADDY PLAYS THE HORN 2)CONFIRMATION 3)
DARN THAT DREAM
SIDE 2) 1) NUMBER FOUR 2)TUTUMN IN NEW YORK
3) YOU CAN DEPEND ON ME

初めて聴いた時は、ずいぶんふざけた演奏だな、酒でも飲んでいるのかな？なんて思いましたが、この寛ぎ方がデクスターの本領發揮なのでしょうか。

『DEXTER BLOWS AND HOT』(DOOTO DTL-307)

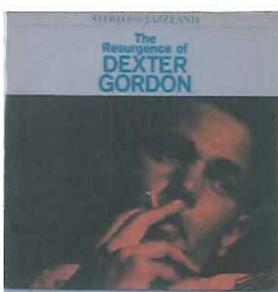


DEXTER GORDON (ts) JIMMY ROBINSON(tp) CARL
PARKINS(p) LEROY VINEGER(b) CHUCK THOMPSON(ds)
1955年11月11日・12日録音
SIDE 1) 1)SILVER PLATED 2)CRY ME A RIVER 3)RHYTHM
MAD 4)DON'T WORRY ABOUT ME 5) I HEAR MUSIC
SIDE 2) 1)BONNA RUE 2)I SHOULD CARE 3)BROWIN'
FOR DOOTSIE 4)TENDERLY

「CRY ME A RIVER」という曲は哀歎たっぷりな曲です。こんな演奏が出来るのもデクスターの持ち味です。

『THE RESURGENCE OF DEXTER GORDON』

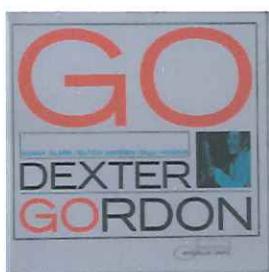
(JAZZLAND 『RIVERSIDE』 929)



DEXTER DORDON (ts) MARTIN BANKS <tp> RICHARD
BOONE <tb>
CHARLES "DOLO" COKER (p) CHARLES GREEN
LAWRENCE MARABLE <ds> 1960年10月13日録音
SIDE 1) 1) HOME RUN 2) DOLO 3) LOVELY LISA
SIDE 2) 1) AFFAIR IN HAVANA 2) JODI 3) FIELD DAY

“ハバマでの情事”・・・いいですねえ。恐らくとても熱いアツい恋だったのではないでしょうか？ ドロー・コッカーというピアニストを知り、興味を持つようになりました。

『GO』(BLUE NOTE 4112) 1962年8月27日



DEXTER DORDON (ts) SONNY CLARK (p) BUTCH WARREN
(b) BILLY HIGGINS(ds) 1962年8月27日録音
SIDE 1) 1) CHEESE CAKE 2) I GUESE I'LL HANG MY
TEARS OUT TO DRY 3) SECOND BALCONY JUMP
SIDE 2) 1) LOVE FOR SALE 2) WHERE ARE YOU 3)
THREE O'CLOCK IN THE MORNING

私が語るのも無理があるのですが、もしデクスターのレコードを教えてくださいと訊かれたら躊躇することなく、このレコードを推薦します。また、私の一番好きなレコードです。デクスターの魅力が詰まったアルバムです。本当は両面すべて掛けたい野心に満ち溢れています。

『THE MONMARTRE COLLECTION Vol. 1』(BLACK LION BLP30102)



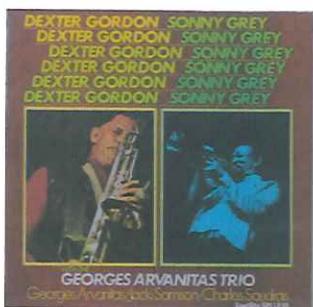
DEXTER GORDON(ts) KENNY DREW(p) NIELS-HENNING
ORSTED PEDERSON(b) ALBERT "TOOTIE" HEATH <ds> 1967
年7月20日録音

SIDE 1) 1) SONNYMOON FOR TWO 2) FOR ALL WE KNOW
SIDE 2) 1) DEVILETTE 2) DOXY

KJFC 例会始まって以来、2回目の暴挙もしくは愚挙（快挙？）をします。つまり LP レコード片面すべて掛けます。前回の年月日は忘れましたが、酒に酔ったふりをしてコルトレーンの『My Favorite Things』を聴いてもらいました。本日は “これぞ男のテナー・サックスの豪快なアドリブと繊細な泣かせのバラード” を堪能していただければ幸いです。それにしてもケニー・ドリューは本当にたいしたピアニストですし、ニールス・ヘニング・オルステッド・ペデルセンのベースは職人技です。余談ですが、デクスターと相性がいいのはケニー・ドリューと信じて

います。『FOR ALL WE KNOW』・・・心に染みます。

『DEXTER GORDON・SONNY GREY WITH THE GEORGES ARVANITAS TRIO』
(SPOTLITE SPJ LP10)



DEXTER GORDON(ts) SONNY GREY (tp) GEORGES
ARVANITAS(p) JACKI SAMSON (b) CHARLES
SAUDRAIS(ds) 1973年2月16日録音

SIDE 1) 1) CALOON BLUES 2) FRIED BANANAS

SIDE 2) 1) NO MATTER HOW 2) DEXTER LEAPS OUT

ソニー・グレイというトランペッターについても、よく分かりません。

調べ方が甘いのでしょうかが、もし興味ある方は、大変申し訳ありませんが、ご調査してください。

とにかくこのレコードは全面お聴かせしたいレコードであります。ハード・バップ・ジャズの好盤（こうばん）であります。あくまでも個人的な感想ですが、ことハード・バップというジャンルで区切ることが可能ならば、名盤であります、ゴードンやグレイもさることながら、アルバニタス（p）の演奏は非常に熱いです。

太字が本日お掛けした曲です。ご清聴を感謝いたします。